

第五章 支店の整備

一 被災支店の再建

当社の支店は、京都・札幌・神田の三店を除き、米軍の空襲で被災したことは既述の如くである。京都は奈良とともに日本の古都、さすがに爆撃を避けたらしい。このうち札幌は米軍進駐によって、営業所のあったビルを接収された。当社は本店社屋の再建と並行して被災支店の再建に努力した。

(一) 名古屋支店の修復

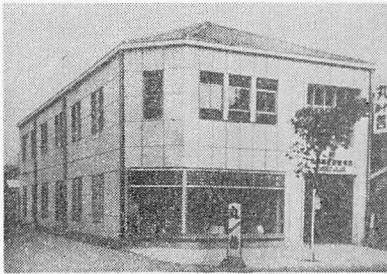
昭和二十年三月十九日の米機空襲による焼失を辛うじて免がれた部分一・二階全部と、被害を受けた三・四階及び地下倉庫等を一時応急的に修理しつつ営業を継続した。とにかく当座は凌げるというので、本格的再建は後まわしになった。

(二) 大阪支店の改修再建築

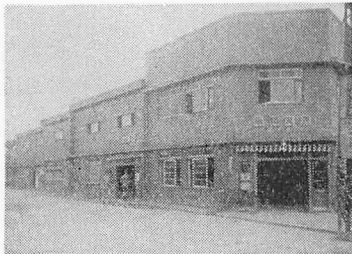
昭和二十年三月十四日、大阪が空襲を受けた際、大阪支店所在の心斎橋筋一帯も焼野原となった。同年四月、生野区にあった社員宿舎を仮事務所とし、また北区宗是町の大阪ビル旧館四階に仮営業所を開くことができた。この営業所は後に同じビルの一階に移転した。焼野原の大阪で、この場所を得るにも、容易ならぬ苦勞をしたものであ



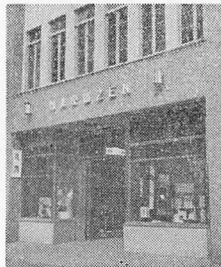
京 都 支 店



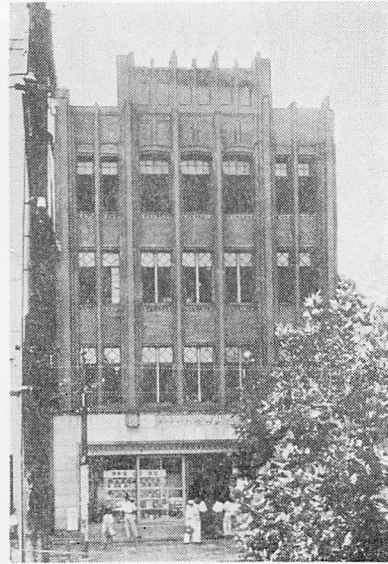
福 岡 支 店



↑ 姫路支店

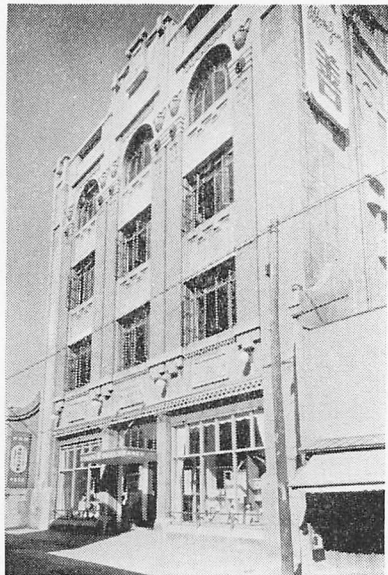


← 長崎支店



名古屋支店 ↑

大 阪 支 店 ↓





神田支店



↓仙台支店↑



横浜出張所



金沢出張所



札幌支店

る。

焼けた当支店は、鉄筋コンクリート造であったため、その外壁や各階の床等は何れも残り損傷も少なかったため、これを利用して改修することに決し、昭和二十二年十二月三十日起工、翌年七月十五日竣工した。因て当日司社長、山本治郎取締役等が出席して落成式を挙げ、翌十六日大阪ビル仮営業所から営業の主力を新社屋に移した。

この建物は、鉄筋コンクリート造地上四階地下一階、延面積一、四三八・〇二平方メートル（四三五坪）、地階は食堂及倉庫、一階は売場・宿直室、二階は売場・画廊、三階は事務室に充て、四階を貸事務室用の予備室とした。当時は、まだ何分にも商品が少なかったためである。

尚、大阪ビル仮営業所は拡充の上、大阪ビル売店として、営業を継続した。

(三) 神戸支店焼失後の臨時措置

神戸支店は、昭和二十年六月五日の空襲で全焼したため、その後、生田区多聞通り神戸駅前の元写真機店を賃借し、ここに仮営業所を設け営業を続けていた。しかし、神戸市全般の被害状況と復興の速度等をも勘案し、同年九月十日、同支店を縮少、神戸出張所として営業をつづけることとした。

(四) 福岡支店の再建築

福岡支店は、昭和十九年二月十六日の隣家からの火災で類焼したため、市の中心地下新川端町に移って、書籍・文具・洋品と分散営業していた。それも二十年六月十九日の夜十一時過ぎから二時間に亘る米機の空襲で全焼した。そこで、市の中心から遠い新大工町に小さな店を借り移った。その二階を事務室、階下を売場として古書・和書な

どを販売した。

一方、戦災直後から支店跡、即ち福岡市上西町十八番地に新社屋建築の計画を立て、昭和二十一年四月二十六日に工を起して同年八月二十日に上棟式を行い、九月二十一日に工を竣えた。そして翌二十二日に新社屋に移り、二十三日から開店した。

これは当社の支店再建第一号であった。この時の社屋は木造亜鉛板葺二階建一階・二階合せて四二三・一四平方メートル（一二八坪余）であった。一階を売場に、二階を事務室にあてた。

(五) 仙台支店の再建

仙台は、昭和二十年七月九日の夜から十日未明にかけて米軍B 29の空襲を受け、市の中心部は焦土となってしまった。国分町にあって、森の都の心のオアシスとして親愛された当支店も灰燼に帰した。

ところで、当支店は当時、第二師団法務部、大湊軍需部、船岡海軍火薬廠、多賀城海軍工廠、国税監査部等に物資を納入すべき命を受けていたので、業務を急拠開始せねばならず、業務再開を非常に焦っていた。その時、支店の顧客でもあった仙台税務監督局国税監査部の宮城徳三郎氏から鶏舎に使っていた小屋が、飼料難で養鶏を廃めたため空いたままあるが、かまわなければ使って見ないかとの話があったので、早速譲り受けて支店の焼跡に移した。間口一間半、奥行四尺の仮小屋であったが、それでも焦土仙台に建った第一号店舗として市民の注意を惹いた。同時に焼けのこった一郭、木町通りの呉服商斎藤氏が、売る商品もなく閉店していたので、その店舗を賃借して一時の根拠地とした。幾許もなく右の建物だけでは手狭になり、南町の太陽生命の焼ビルの二階に事務所を移し、木町

通りの遠正文具店の空き店と荒町の小林雜貨店を借りうけ事務所を中心に市内の北と南に売店を設けた。

右のような活動の一方において、焼跡の整理を進め社屋の再建を決定し、昭和二十年十月三十日新築社屋を起工、翌年九月十日落成、同日から開店した。そして同年十一月三十日同所に倉庫を起工、翌二十二年二月十日竣工した。店舗は木造瓦葺平家建一八一・八二平方メートル（五五坪余）、倉庫は木造瓦葺平家建二一九・〇一平方メートル（二六坪）であった。

かようにしてようやく本来の独自の商売に入ることができた。

新築開店後は戦前に倍する業績を挙げ、昭和二十三年には、早くも狹隘を感じ、店舗拡張の必要を痛感せざるを得なかった。

丁度、略ぼ時を同じくして仙台市の都市計画が進行、その計画による新道路の開設に伴って敷地の約二割五分が仙台市に分割買収され、店舗の一角が新道路の区画内に組入されることになった。そのため店舗建物の約半分を倉庫の隣に曳き移し、同時にその跡と隣りの空地に新店舗として二階建社屋を新築することとなり、昭和二十四年十月七日起工、同年十二月十三日に竣工、一日において十五日から開店した。モルタル塗スレート葺木造二階建延面積三六六・九四平方メートル（一一一坪余）で一階を洋品・文具売場、二階を書籍売場とした。

それ以来、昭和三十五年四月二十日、仙台市東一番丁に売店を開くまで、この建物で営業を続けた。

(六) 札幌支店の被接收と再建

札幌支店は、札幌市北三条西三丁目の大同生命館に於て昭和十年十一月二十三日以来、二十年九月下旬まで営業

していた。しかし札幌に進駐してきた連合軍によって大同生命館は接収され、二十四時間以内に立退くよう命令を受けた。そこで商品及營業用器材一切を他に預け、全支店員が協力して營業可能の建物をさがした。

幸いにも、同市南一条西三丁目の電車通りに元札幌繊維製品小売業組合所有の建物を処分する意向のあることを知り、熱心にその買収交渉を進めて成功した。そこで十月以降買収建物の改修工事を始め、商品、什器類を預け先より回収、同年十二月十五日營業を開始した。その間休業三カ月であった。

この建物は、もともと明治二十年代末の建築であり、かつ戦災を受けない市のこととて、札幌の一級商店街の建物としては、みすばらしいものであったが、開店後から順調に成績を上げることが出来た。

昭和二十四年に至って二階を改造し、洋書・和書の両売場とし、一階に文具・洋品売場のほか第二部門として時計部・眼鏡部を置いた。

二 支店の組織整備

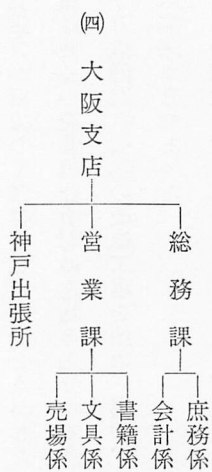
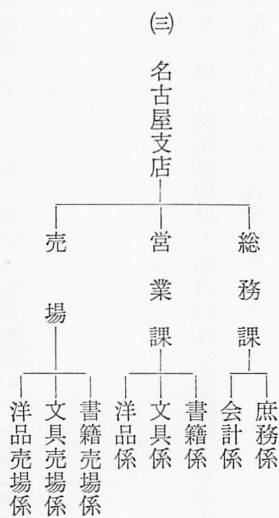
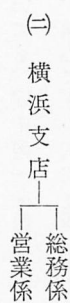
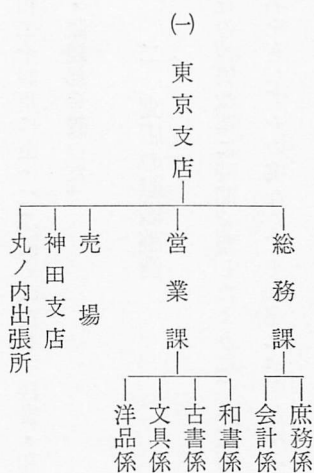
本社の機構改革に時間を要したように、各支店の機構も、極く初期は被災・応召社員の後帰状況も不確実のため、その名を有してその実なく、それぞれがあらゆる仕事を分担するという状況であった。

本店の本建築進行中から、支店の營業状況も漸く光明を認められたので、昭和二十二年四月二十一日の取締役会で、支店職制を全社的に統一することを決議し、五月一日より実施の旨、各支店に通達した。

この時、支店と認められたものは東京支店、横浜支店、名古屋支店、京都支店、大阪支店、福岡支店、仙台支店、

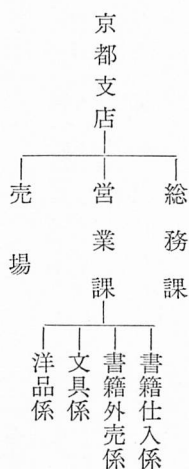
札幌支店の八支店であった。

右の通達に示された各支店の組織（五月十日訂正後）は次表のようである。

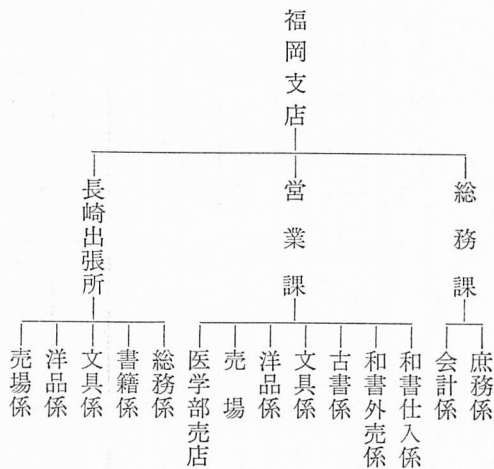


次に昭和二十年から昭和二十五年までの各支店長の任期表を掲げておきたい。

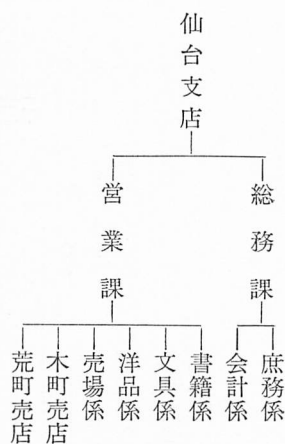
(五)



(六)

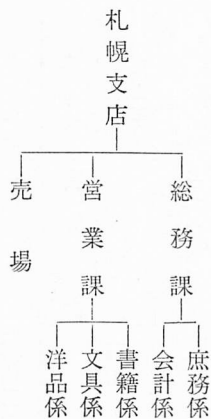


(七)



木町売店及び荒町売店は係と同格、荒町売店は二十三年十二月五日閉鎖。尚二十五年七月十五日売場が課として設けられ総務・営業・売場の三課編成となった。

(八)



支店長任期表

支店名	年次	
	昭和二十年	昭和二十一年
東京支店	八月現在	昭和二十二年
神田支店	(支店長空席)	昭和二十三年
横浜支店	伊藤 四良	上田 憲治 五・二・二十五
名古屋支店	山本 治郎	柘植福太郎 二・一・八・二出張所となる
大阪支店	中山 良謙	佐藤 五夫 三・十五
京都支店	日向野寛一	北川 生次 三・一
神戸支店	中山 良謙 九・十出張所となる	
姫路支店	(姫路丸善)	松本 勝二 七・二・一
福岡支店	斎藤 哲郎	
長崎支店		杉 健 十・一
仙台支店	中村春太郎 木村金治郎 十一・一	小林 俊亮 八・十五支店となる
札幌支店	八反田源治	伊達 研三 十・一
		八反田源治 十・十五
		上田 憲治 四・一
		石川 万介 四・一

三 支店組織の異動

昭和二十二年当時の支店組織の大綱は右のようであったが、商況の変化、業務の発展・異動に伴って、臨機の処置を執ったことはいうまでもない。

以下に右の職制決定前後における変化を補っておきたい。

(一) 東京支店

昭和二十二年二月、改修を了った昭和別館に本社の事務部門が第一生命京橋ビルから移転した際に、その小売部だけを京橋ビルに残したことは既述したが、その時小売部を支店に昇格、東京支店と称することを決定していた。この段階では、京橋の小売部は六係―和洋書係・古書係・文具係・洋品係・外壳係・庶務会計係がおかれたのみで課の編制はなく、ほかに神田支店と丸ノ内出張所が存続していた。正式に東京支店が課編制になったのは、前記の昭和二十二年五月一日からであった。

昭和二十二年十二月、日本橋通二丁目の建物落成とともに、京橋ビルに残留した東京支店は日本橋に移転した。翌二十三年一月一日、東京支店の売場を第一売場（和書・古書）、第二売場（文具・洋品）の二つに分けた。これは商品の量が増加したためである。神田支店と丸ノ内出張所はそれぞれ東京支店の一課と同格と定められた。

さらに神田支店は、昭和二十三年六月一日から本社の直轄支店となった。

昭和二十四年二月一日に、本社機構の一部が改正せられたが、その際、東京支店を廃止、本社営業部第一（和書・

古書)、第二(文具・洋品)売場となった。

(二) 横浜支店

既述のように日吉に移ったこの支店は、昭和二十四年八月一日廃止、本社直属の出張所となった。横浜出張所は横浜市港北区日吉の慶応義塾大学日吉校舎の反対側に位置していた。

(三) 名古屋支店

昭和二十五年五月一日、営業課・売場を改組して書籍課・文具課・洋品課を置いた。

(四) 大阪支店

大阪支店の位置は、戦前の通りで、顧客の交通の不便などを考えて各所に一時的或いは半恒久的に売店を置いて要望にこたえようとした。そのような情勢の中で、罹災した神戸支店の縮少組織を神戸出張所としてその管轄に加えたことは、既述の通りである。しかしその期間は短かく、同出張所は昭和二十二年十月一日、本社直轄となった。大阪支店は昭和二十五年四月一日、営業課を改組、仕入課・販売課・売場の三課とし、従来の三課から四課に拡大した。

(五) 姫路支店の新設

昭和二十三年十二月一日、姫路市中二階町二十七番地に、姫路支店を新設、営業を開始した。この支店は実質的には姫路丸善の事業をそのまま継承したものであった。

日華事変勃発後、播州方面では軍需工業が勃興し、従って附近一帯の都市は著しい発展振りを示した。そこで当

社でも同方面への進出を企て、昭和十五年八月十二日、姫路市綿町十二番地に、神戸支店の出張員詰所を設け、将来の支店設置の準備工作を進めたのであった。幸いに業績は順調に向上したので、更に同地附近の繁栄に貢献するために、当社直営の店舗を設立し、事業を拡張しようと画策した。けれども、附近同業者組合は、古い因襲的な考えから異議をとなえ、兎角、当社の意向と歩調を異にするものがあるなど複雑な事情が生じて、当初の計画が行われそうになかった。

偶然、姫路市中二階町二十七番地にあった姫路宝文館と当社との間に契約が成立して、昭和十七年九月十一日当社は、同館に出資参加し、協同経営のもとに株式会社姫路宝文館の名で営業を始めた。其の後同館の業績は順調に伸び、将来の見通しも略ぼついたので、翌十八年四月二十日の株主総会で、増資並びに株式会社姫路丸善と改称することを議決して、名実ともに当社の傍系会社として自立することとなったのである。

姫路丸善は益々発展して基礎も漸次に堅実となって行つたが、昭和二十年七月四日夜半の空襲で社屋物品とも、すべて灰燼に帰したため、直ちに同所に仮営業所を設けて業務の復興に努力した。その後業績が大いに挙げ、将来を嘱望せらるるに至った。而して昭和二十二年十月二十日附申入によつて姫路丸善の営業及財産を当社が譲受けることとなった。そこで翌二十三年三月二日売買契約を締結し、同時に姫路丸善では株主総会を開いて解散を議決した。右のような過程を経て姫路丸善は解散し、本社直轄の支店として同年十二月一日発足するに至つたのである。このとき姫路支店には、総務係・営業係の二係を置いた。昭和二十四年十二月文具係・岡山地方販売係を設けた。

(六) 福岡支店

長崎出張所の支店昇格後福岡支店は、総務・営業の二課のみであったが、昭和二十五年三月一日、売場を課として設け、二課一売場となった。

(七) 長崎支店新設

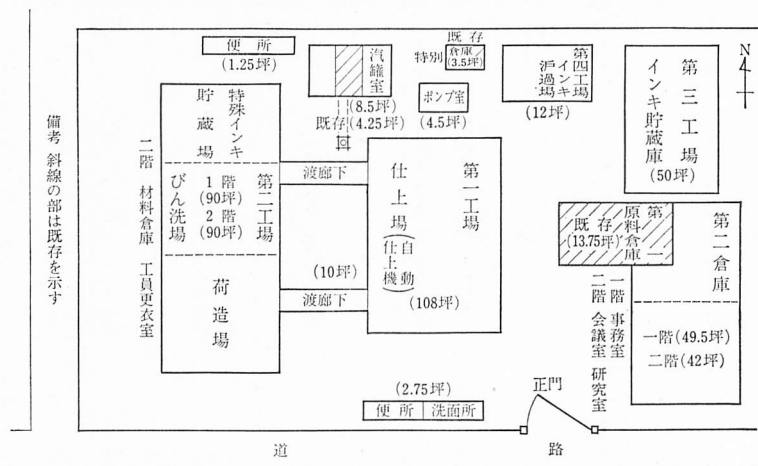
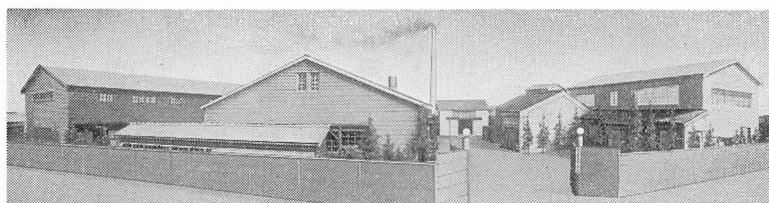
長崎出張所は、昭和十四年四月一日、同市鍛冶屋町乙四一番地に創設以来、福岡支店に所属していたが、昭和二十年八月九日、長崎に原子爆弾が投下された際にも、建物・商品の被害は少なかった。その上、連合軍の駐屯、外国船舶の寄港も多く、将来の発展も予想されたので、昭和二十二年八月一日支店に昇格した。同支店には課はかず、総務・書籍・文具・洋品・売場の五つの係を置いた。

四 インキ工場の新設・整備

荒川区日暮里三丁目七七七所在のインキ製造の日暮里工場は、昭和二十年四月十三日の空襲で全焼した。ただまことに幸いなことに原料倉庫だけが焼失を免がれ、戦後の再建に非常に役に立った。以来、インキの製造は駒込工場にのみ頼っていたが、その製造量は昭和十六年度の約七十四分の一であった。

その頃、偶然、新潟県中蒲原郡小須戸町大字矢代田一九二二番地（矢代田駅前）に、インキ工場設置に適する空家があるのを知り、これを借用してインキ工場にすることに決し、昭和二十年末に工場設置申請を提出した。翌二十一年二月八日付で許可になったので、早速改造に着手した。

かようにして、駒込・矢代田両工場の操業は開始されたが、それでもその全生産高は、昭和十六年の生産高の僅



日暮里工場



矢代田工場

かに六分の一に過ぎなかった。いうまでもなくインキの製造販売は当社の重要部門の一つであって、その成績如何は当社の業績に多大の影響を及ぼすことを避けられないのであった。しかも駒込工場は小規模で拡張の余地がないのが実情であったため、如何しても、急いで日暮里工場の新築復興を行うよりほかなかった。そこで、昭和二十二年三月三日、日暮里工場焼跡で地鎮祭を行い工事に着手、同年五月十三日第一期計画による建物、即ち第一・第三工場及び事務室の上棟式を行い、これらの建物の竣工を待って、翌二十三年一月六日第二期計画による建物、即ち第二工場及びその他の附属建物の上棟式を行い、同年九月十八日落成式を行った。それから工場の内部施設を整えて、昭和二十四年一月十八日から操業を開始した。

日暮里工場は敷地三、〇〇四・六四平方メートル（九〇八・九坪）、建物はスレート葺木造で建築延面積一、六一九・八四平方メートル（四九〇坪）であった。

日暮里工場の開設に伴って駒込工場は全く操業を止め、一方、昭和二十四年十一月末矢代田工場も閉鎖した。

五 青戸工場の開設

万年筆製造工場であった荏原工場は昭和二十年五月二十四日の空襲で全焼していた。しかもこれを急速に再興することは殆んど望むことができない状態であった。そのため傍系会社である東京都葛飾区青戸町一丁目一九五番地所在のアサヒ製図器株式会社構内の一部建物を賃借して青戸工場を設立することを決した。

そこで荏原工場の焼跡から、火を被った工作器械（轆轤、電気炉、ベンロール、一般工具）を、青戸へ馬車で運

び、近藤正之荏原工場係長、土屋正司等が中心となって補修再生に尽力した。かくて昭和二十一年十月、前記の場所に工場を新設した。昭和二十五年にはペン先の製造を始めたが、当時はまだ金ペンの製造は許可されず、ステンレスペン（一八・八ニッケルクローム）、バラテナペンなどが主な製品であった。当時下請工場であった川上製作所で製造したアテナデヤトウ万年筆は文具売場で販売され好評を得た。